

6 穂高町V高松 仲幸さん

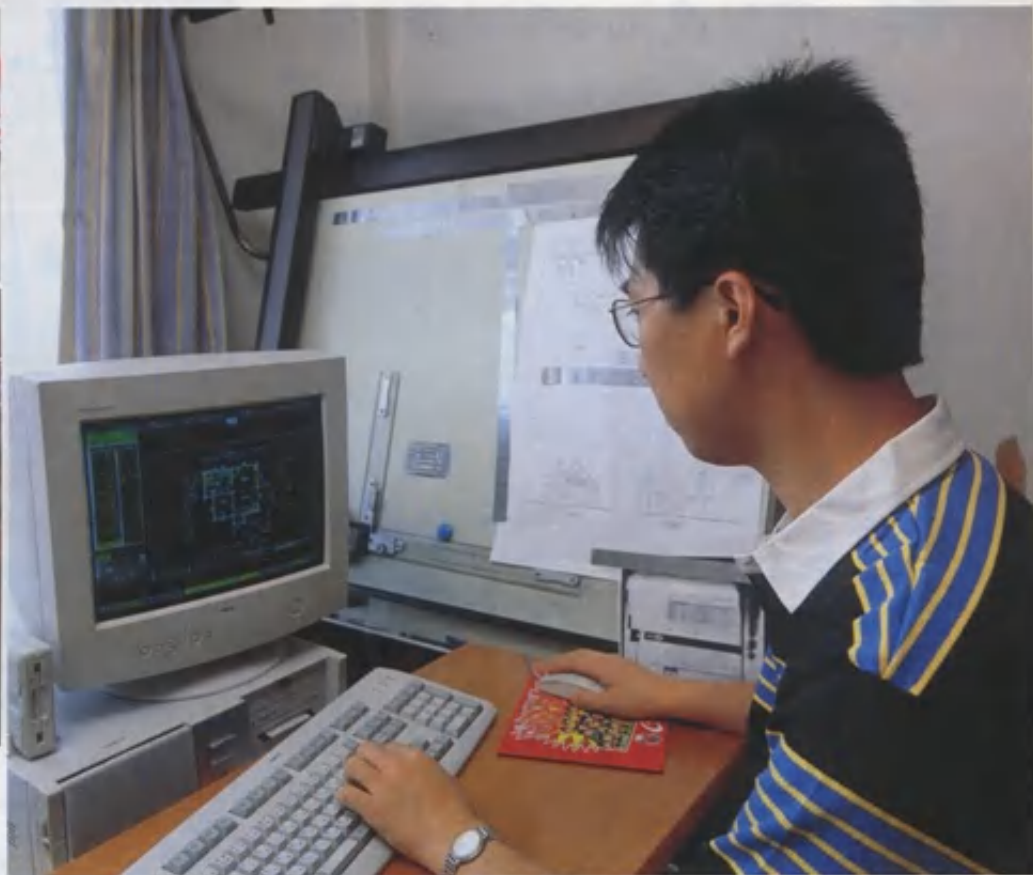
# ここは、僕にとって目的を実現できる場所

「自分がやりたいことをやるためには、この場所がベストに近い」と考えた高松さんが穂高に暮らしはじめて4年半がたつ。自然だけでもなく、仕事だけでもない、自分の生き方を考えたとき、ちょうどいいバランスが成り立つ場所をここに見つけたのだ。





上/実は、コンサドーレ札幌のオフィシャルサポーターズクラブに入会しているサッカーファン。  
下/仕事中に聴くのはクラシック。「いつかウィーンフィルのニューイヤーコンサートをライブで聴きたい」



「設計」と言っても、全体の図面から部材の発注図面まで、必要な図面はかなり多く、一軒着工すること分厚いファイルが重なっていく。

穂高町に暮らす高松さんは、ログハウス専門の設計者だ。信州にやって来たのは98年の2月。オリンピック開催直前のこと。出身は和歌山で、大学は奈良。大学を卒業するまでずっと関西、東京に就職し、2年間を過ごしたが、「これから先の生活を考えると、自分にはあわない場所」と感じて転職を決意。そんなとき、気分転換のつもりで訪れたのが北海道。そこで出会った風景が、今の仕事を始めるきっかけになった。

## 豊かな自然と生活の便利さと

北海道では、人気テレビドラマの舞台としても知られる富良野で幾日かを過ごした。「雄大」という言葉がびつたりくる風景と、テレビで見たのと同じようなログハウスが目に見え付いた。

頭からそのイメージが離れず、「こういう風景で気持ちいい」としみじみ感じた。

旅を終えた高松さんは、北海道で芽生えた思いを胸に、早速新たな職探しを始め、望みどおりログハウスの販売施工会社に入社。大阪に移り住んだ。

長野県は、ログハウスの建築確認申請が最も多く、全国的にみても有数の建築エリアだというが、高松さんは、その長野県を担当地域として受け持つことになった。ほぼ毎週のように、大阪から県内各地の施工現場や業者のもとを訪れながら、営業や施工管理の仕事に

励むことでどんどんログの世界にのめり込み、とうとう建築士の資格を取得。いつしかフリーになって思い切りログハウスづくりに専念したい、そう思うようになった。

そのとき頭に浮かんだのが、通い慣れた長野県のこと。

「信州の風景にログハウスがびつたりするといふのも、もちろん僕にとつては大切なことでしたが、仕事関係の知り合いが多かったことも、安心材料でした」と高松さん。

「僕の場合、地域に密着した暮らしをきちんとしているわけじゃないんです。だから、あまり誉められた「ターナー」者じゃないですよ(笑)。自分の仕事や生活を考えたとき、「ここが一番目的に合っている」と思ったから来た、というだけなんです」

穂高の中心街は、何の不自由もなく暮らせる場所。それでいて、車を少し走らせればすぐそこに自然がある。そのことが、何ともいえない魅力だった、と高松さんは言う。そして、北海道で見た光景と似ている気がする、とも。

## 山を愛した父と幼少時代の思い出

一人暮らしの高松さんの生活拠点兼事務所は、どこにもでもあるようなごく普通のアパート。畑や田んぼを耕したり、花を育てる生活をしているわけではない。

「田舎暮らしを望んだというより、都会暮らしを避けたという方が正しいかもしれない」という言葉も嘘ではないだろう。



穂高の風景がカナダに似ている、と感じたのは、現地のログハウスメーカーを見学したときのこと。



高校2年の五竜岳登山。山頂で過ごすゆったりとした時間が好きだった。



「北アルプスがすぐそこに広がってるって、すごいことですよ、やっぱり……」

## 北アルプスを見るたびに 感激しました

だが、田舎の暮らし、身のまわりの環境に関心がないわけではない。

そもそも、高校時代は登山部に所属した山好き。なかでも北アルプスは、当時から何度も登った大好きな山。下界から遠く離れた山頂で、全てのことから解放され、「何も考えずにボーッとするのが好きだった」と振り返る。

同じように高校時代に始めたスキーもかよりの腕前らしい。大学時代には、白馬の民宿で居候するほど熟中した。

実は、信州には子どもの頃から家族旅行で何度も訪れていた。父親が、大の山好きで、スキー愛好者だったのだ。

自然にどっぷり浸かるわけではないけれど、どこかで触れていたいという気持ちを持っていたのも、ログハウスの建つ風景に無性に魅かれたのも、父親の影響や幼少時代の体験と無関係ではないだろう。

いまは仕事で忙しく、県内外を駆けずりまわるので精一杯で、山登りもスキーもしばらくくく無沙汰しているが、「いつか再開したい」と考えているそうだ。

**当たり前前にそこに「ある」  
そんな幸せもいい**

高松さんは、自分自身を「スレてきちゃったんじゃないだろうか？」と思うことがあるという。それは、目の前の北アルプスを新鮮に感じなくなったことに気が付いたときだ。

「最初のうちは毎朝目にするたびに感激し

たのに、いまでは見慣れてしまっただけで、そこにあるのが当たり前になっていっているんです」

ただ、「あるのが当たり前でいられることって、幸せだとも思うんです。山が、自分の暮らしの一部になってきたのかな、という気もするんですよ」

当たり前すぎて、大切さを見失うという話。信州で生まれ育った者には少々耳が痛い。カナダに出掛けた際の話も聞かせてもらって、一層そう思った。

それは、穂高移住の直前、本場カナダにあるログハウスメーカーの見学に出掛けたときのこと。「カナダと信州は雰囲気似ている」と感じたそうだ。

「もちろんスケールは違いますが、周囲に高い山があつて、街を囲むようにたくさん自然があるのは、信州と同じだなあと感じました。ここは、カナダのミニチュア版という気がするんです」

もちろん海外もいけれど、当たり前すぎて見ようとしてもしなかつたもの、自分の足もとにあるものに目を向けてみることも、ときには必要なのかもしれない。「ない」のではなく、「見えなかっただけ」の何かに気づくことだってできるかもしれない。

**季節の変わり目に  
自然を感じて**

高松さんに、好きな季節を訊ねてみた。「ずっと秋が好きでした。四季といつても変



組み立て作業の現場。県内外に仕事先は広がっている。



この日訪れた林さん宅のように、ログハウスを建てるお施主さんには、こだわりのある人が多く、知識も豊富。だから、顔をあわせればログ談義にも花が咲く。

>>DATA



**【高松建築工房】**  
 南安芸郡穂高町穂高  
 TEL. 0263-82-1260  
 URL: <http://www.takamatsu-log.com>

化があまりないというか、季節感が薄いというか、そんな場所です。育ったせいかな、一番過「こしやうい季節が、かつては秋だったんです」

それが、穂高に暮らしはじめて変化しました。「今は、どの季節が好きというかわりはないですね。それぞれの季節ごとに違いがあつて、それぞれの気持ち良さがあるでしょう。だからだと思つてますけど……」

山並みの辺りがぼんやりしはじめ、モヤモヤしてくると「もう春だな」と思う。

夏の過「こしやすさは格別だ」

「信州の人は暑い暑いって言いますが、関西に比べたらまだまだですよ。空気のじつとり感が違います」と笑う。

空気がどんどん澄んできて、山との距離感がぐつと近くなると秋を感じる。

「お盆が過ぎたなと思うと、すぐ赤トンボが飛ぶんですよ。トンボがカラレンダーを見て、そろそろ出番だぞ」と言つてるんじゃないかと思うくらいに正確で、びつくりしました」

秋はまだ、その短さにも驚いたという。あつという間に秋が終わり、すぐ冬がやって来るように感じた。

しかし、長く厳しい冬にも、もう慣れたそうです。

「朝、玄関のドアを開けた瞬間、顔にピリッと感じる空気の冷たさが好きになりました」

そして「安曇野のあたりは、開発が進んで風景が変わつてきたと言つてもいいですが、僕にはまだまだきれいだなあつて思う光景がたくさんあると思います」とも。

たとえ土に触れる暮らしをしなくても、季節の変わり目に自然を感じ、その度に信州

に移り住んだ自分を再確認しているのなら、それは十分に「田舎暮らし」と言えるのではないだろうか。

自称「暮められない1ターナー者」は、自分で思うよりもずっと、穂高という土地に馴染んで暮らしているようだ。

## 今はまだ完成ではない

ログハウスというのは、竣工時が完成というわけではない、と高松さんは言う。

「新建材を使った住宅は、100%の状態まで竣工して、住み始めると同時に古くなつていくのですが、ログハウスの場合、とりあえず器ができたというくらい、70%くらいの状態から、どんどん木材が馴染んで、味わいが出て良くなつていくんです」

メンテナンスのため、お施主さんのお宅へうかがうというので、ご一緒させていただいた。

お施主さんとあれこれ話し込む様子は実に楽しげで、本当に「お客さんと一からつくりあげる仕事をいっぱいしていきたい」と感じていることが伝わってくる。

「そのためにも、当たり前のことを当たり前前にもやつていくだけ。まだまだこれからです」と語る口調は穏やかだが、完成後にも「成長」するログハウスのように変化を重ね、いつか自分の夢を叶える人に違いない。

「ゆくゆくは、自分のログハウスを持ちたいですね」

きつと、その日も遠くないだろう。